

26.食が貧困状態を変える：子どもが当たり前で食事出来るようにするためにすべきこと

平本駿介

はじめに

日本の格差問題として挙げられるものは、経済格差、教育格差、健康格差などが上げられると思う。しかしこれらに以外に食格差という問題が新たに生まれた。自分たちはなかなか認識のないものである。経済格差や教育格差などはニュースや学校の授業などに取り上げられてその問題は知っていた。食格差は本を読んでみて食格差が全ての格差に関連しておりそれを縮小することは子どもの貧困をなくすために重要な役割であることを知った。実際この食格差はどのような問題をもたらす子どもの貧困にどのような影響があるのかを調べていきたい。なぜこのテーマで調査するかというと、自分たちは基本朝、昼、夜三食の食事があるのが当たり前になっておりこの食事が一つでも欠けるとお腹が空から何か食べたいと思って食べることができる。しかし学校の日では親の経済状況などにより三食しっかりバランスの良い食事を食べることができない子どもが多くいるのだ。実際「子どもの7人に1人は貧困」というデータも最近ニュースや子どもの貧困に関するニュースで多く取り上げられてきた。国は子どもの貧困対策として教育に関する対策が多い。なぜなら「充実した教育がないと学歴が低くなり、成人後の貧困に影響がある」からであり、衣食住などの生活基本条件ともいえる分野への支援は手薄というのが現状である。多くの人は子どもの食格差問題があるということを知らないであろう。全ての貧困には食が大きく関連しているということを知ってほしいからこのテーマを選んだ。この文章の展開としては「子どもの貧困Ⅱ」「子どもの貧困と食格差～お腹いっぱい食べさせたい～」二つの本を参考にして話しを展開していく、はじめに子どもの貧困状況、その原因を述べる。その中で子どもの食格差の実態、子どもの食格差が起こることによってどのような影響をもたらすのかを述べる。そして実際に国が取っている政策やこの本の筆者たちの対策、食格差縮小の対策のひとつある学校給食の重要性を述べ、日本の学校や地域が食格差是正のために行なっていることを紹介し、意見や考えを述べていく。

1章 子どもの貧困状況・食格差実態

序章にも述べたように日本は「子どもの7人に1人は貧困」である。これの主な原因としては3つあり、1つ目は子どもの貧困問題は家族の問題ではなく構造的な問題であること。2つ目は社会的形成である。3つ目は教育が問題である。これは厚生労働省の1985年から2009年までの相対貧困率の推移では、3つの事実がある。1つ目は1985年の時点においてさえ、日本の子どもの貧困率はすでに10.9%もあり、つまり日本はこの頃から「子どもの10人に1人は貧困」であることがわかる。この頃は国民も「子どもの貧困」には注目しておらず社会問題にはなっていないがなぜ国はこの現状を知っていたのにもかかわらず、早くから公表して対策をしなかったかは疑問が残るところである。早くから公表していれば今の「7人に1人は貧困」ということは抑えられたのかもしれないと思う。2つ目は1985年から2009年にかけて多少の増減はあるものの、子どもの貧困率が右肩上がりに上昇し続けており、国民全体の貧困率も上昇しているが、その理由は貧困率の上昇が単なる景気動向の影響されているものではないからである。3つ目は子どもがいるような勤労世代の世帯においては、貧困問題は発生しないと考えられていたが子どもの貧困率の上昇のペースが社会全

体の貧困率の上昇ペースに比べて早いことだ。

では子ども期に貧困であることでどのような影響があるのか、貧困状況に育った子どもは、学力や学歴が低いリスク、健康状態が悪いリスク、大人になっても貧困であるリスクが、そうでない子どもに比べて高く、統計的には子ども期の貧困は、大人になってからの賃金や生産性も低くするので、社会経済全体にも大きな損失となる。現在の日本は学歴社会であるので大学進学することかよい専門技術を持っているようなことがなければ安定したよい会社にはなかなか入ることが出来ない。そのためには子どものころから努力をしてしっかり勉強していくことが大切であるが、子ども期の貧困を経験することで本来身につく学力が身につかず、選べる職種も限られてくるため就職活動の時に失敗してしまい職を失ってしまうことで現在の社会問題でもある非正規雇用の増大にもつながってくるのだと思う。またそのほかに子どもの貧困が「自尊感情が低い」「不安」「自己肯定感が持てない」「精神的に不安定」「希望が持てない」などといった心理的への影響を引き起こしており、「将来の夢がない」と答える人が貧困層は高く、そのことで学習する意欲が奪われているのも一つの原因だと考えられる。ではどのような世帯の貧困率が高いのか。特に厳しい状況なのは、ひとり親世帯に属する子どもであり、世帯構造別では 52%と他の世帯より特に高く、子どもの数が多ければ多いほど貧困率は高くなる。そして、親の学歴別では、大卒以上は 8%、高卒は 22%であるが、中卒の人は高卒よりはるかに高い 45%である。(注 1) なぜこんなに高卒と中卒の人と貧困率に差が開くのか、それは子どもを抱えての正規雇用は難しく、半数は非正規雇用者であり、多くの収入を得られず子どもを育てるのが困難なのである。女性のひとり親世帯は正規であっても男性と同等の賃金がもらえないという男女の雇用賃金の格差が生まれているのだ。

このことが子どもの食格差にも関連してくる食費は家計の中でも 20%ほど占めるといわれ、それが家計の圧迫の対象にもなってしまいうだからといって硬直的な家賃や公共料金、交通費、子どもの教育費は削ることはできないので食費を少しでも減らし他のところにあてるために安い栄養的には貧相な食べ物に偏ってしまうのだ。また世帯別の野菜や肉、魚を食べる頻度では一般の世帯に比べて貧困世帯は割合が低いことが東京都の調査で明らかになっている。これらの摂取量が異なるため必然的に栄養素が一般世帯と比べ、貧困世帯は低くなる。現在の日本の各家庭の学校が休みの日の子どもの朝食の摂取状況、食品群別摂取頻度の結果からすると、貧困層の子どもの特徴として朝食を毎日食べる子どもの割合が少ないという結果になった。また食品群別摂取頻度では貧困層の子どもは野菜を食べる頻度が少なく、魚・肉の加工品や簡単な食事であるインスタント麺を食べる頻度が多い。

なぜこのようなことが起こる背景は収入が少ないことによって、経済的にゆとりがなく、必要な食物を買えないことのほかに、時間的ゆとりがなく食事づくりに時間がかけられないこと、保護者の知識が少ないこと等があるからである。このように学校がない日はこのように世帯収入によって差があるが、学校がある日は給食があり、1日提供される栄養量が国の栄養基準に基づき、自治体、各学校でしっかり栄養管理されているため差が小さいことが分かっている。

子どもがバランスの悪い食事や三食取っていないとどのようなことで影響があると考えられているのか。学校の勉強がはかどらず授業に集中できないことや運動が満足にできない体力がないということが起こる。また海外の研究では貧困層の子どもでは、将来さまざま

な疾病で死亡する確率が高くなる。その要因として3つある。1つ目が子どもの頃の低栄養による将来の生活習慣病の危険、2つ目は子どもの頃に形成された望ましくない生活習慣（朝食を抜くなど）が将来に継続されること、3つ目は将来も経済的な困窮に陥りやすいことである。したがって、子どもの食事の質と量が乏しいと、子どもの成長を阻害し、成人期の肥満やメタボリックシンドロームのリスクを高めることになる。また、子どもの頃にさまざまな食物を食べ、健康的な食事をする生活経験が乏しいことは、将来健康的な食事スキルが低く栄養バランスが偏った食事につながり、それがさらに将来の生活習慣病のリスクを高め、より多くの医療費支出や仕事の継続困難、経済的困難につながる可能性もあるのだ。そしてその子が親になったときに、自分の子どものための食事の知識やスキルが乏しいという食生活の貧困の連鎖につながる可能性がある。このように子どもの貧困には経済的困難が多く挙げられると思うが、それらも食格差も絡んでいることを忘れてはならない。次の章では子どもの貧困の対策、食格差の対策、子どもの食格差の減少にもつながる学校給食の重要性について述べていく。

2章 日本の貧困を変えるには何が必要か・日本の学校給食の重要性

対策として景気回復をするべきと考える人は多くいるだろうが、過去に先進諸国の景気回復で国全体が経済成長しても最貧層の所得は上がらず、ますます社会の底辺に押し込まれている国もあり、最貧層の所得が上がった国は、勤労所得が上昇したのではなく、スウェーデン、アイルランド、イギリスのように政府からの現金給付が上昇していたのであり、逆に、最貧層の所得が据え置かれている国は、アメリカ、ドイツ、オーストラリアのように政府からの現金給付が横ばいであったので、経済成長の便益が、市場経済を通して経済成長が最貧層の所得の増加と結びつくためには、政府からの現金給付というメカニズムが必要なのだ。筆者たちの貧困の子どもたちが抱える問題は大人になるための経路で「金銭的経路」「家庭環境」「遺伝子」「職業」「健康」「意識」多岐にわたって存在する。

それぞれの経路では何が必要なのか。金銭的問題としては最近子どもの人生におけるがんばる力や観察力、感性というような経験もお金で買うようになりつつある。しかし、子ども進学のために、大きな障壁となるのが家計で、目の前の家計の状況が厳しく最低限の生活もできなければ、将来の所得よりも現在の所得を選ぶので、子どもたちを学校に行かせるために就業しながら学業も出来るオプションを増やす、一時的でも家族への経済的支援を行なうなどの施策が必要である。次に家庭環境を介した経路としては、心にゆとりのない生活が続くことは子どもの成長に著しく影響する。親のストレスが高まった時には「ゆとりをもって子育て」などとうてい出来なくなり、最悪の場合には児童虐待などにも繋がる。また、経済的ストレスにさらされた親はけんかや口論、特に暴力などを振るう確率が高くなり、それが直接的に子どもに対するものでないにしても、子どもの成長に影響する。親が過度のストレス状態にあることは、子ども自身的情緒的発達を妨げる。その他に強いストレスを抱えた母親から生まれた子どもは出生体重が少なく、さらに生まれた後も情緒的な問題を抱えるリスクが高くなる。強いストレスは健康状態に影響し、さまざまな疾病を引き起こすリスクが高くなる。親と過ごす時間が少ないことで、読み聞かせや宿題などの勉強を見てもらう、一緒に遊びなどの直接的な影響や、病気の時に十分なケアを受けられない何か異常に気づくのが遅れるなどの間接的な影響も起こる。貧困層の親は社会的に孤立している割合が高

く、親の孤立は児童虐待などを引き起こすリスクをはらんでいるだけでなく親が子育てに関する情報を収集し、子どもが同世代の子どもと遊ぶ機会を少なくし、親も子ども孤立するリスクを高くするのだ。

このように親の孤立を防ぐ対策が必要である。また虐待や子どもの孤立を防ぐために青砥恭氏が支援をしていた子どものための学習支援教室や我々が参加している子ども食堂をもっと多くの人に知ってもらい現状を知っている人たちや立場のある人たちがそのような子どもを誘ってこのような居場所があることを知ってもらうことが大切だ。

遺伝子での経路では親の認知能力と子の認知能力にはある程度相関があるが、親から子への認知能力の遺伝が「貧困の連鎖」を引き起こす影響は限定的である。家庭環境であれば、外からの介入によって改善できる。職業での経路では、親の職業は子どもの学力や能力に関係なく、親子間で継承されることが多く、自営業などは有形・無形の資産が存在し、それを親から子どもに伝承することが可能である。地方などでは職種や職場が限られ、親元に残るという選択することがおのずと職業選択の幅を狭めることになり、すなわち子どもが限られた範囲での職業選択をすることによって親と子の職業連鎖が起こり、親のそのままの収入が子どもの収入となっていくのだ。

健康の経路は、先に述べたように貧困層は健康状態が悪い。けがや病気をしたときその影響も大きい。貧困層家庭においては、親が仕事などで不在しがちであり、子どもの病気に気づくのが遅れたり、看病ができなかったりすることがある。貧困層の子どもは、そうでない子に比べて、健康状態が悪い要因は、劣悪な住環境、貧相な栄養、親のケアの欠如、家庭内のストレスなどである。病院は基本親がいなければ子どもは病名をなかなか理解がしにくい。だから、親が仕事でいない間に子どもが少しでも異変に気づいたらあるところに電話をしたら付き添いということでその子どもと一緒に病院について行ってくれて、その子どもの親とつながりを持ち、病名を電話または手紙で伝えてくれるヘルパーのように気軽に頼ることのできる人を設置するべきだ。意識についての経路については、貧困層の子どもは自分自身の将来について明るい見通しをもっていないことがあげられる。

貧困層の親が自分の子が世の中の役に立つ仕事をしていると思う割合自体が非貧困層より低い。たとえば親がそう思っている場合でも子ども自身、自分が将来役に立つ仕事をしていると思っていない割合が高い。(注1)

このような自信のない子どもたちが自信をもって自立できるように気軽に人生相談、日頃の相談ができるような学校のスクールカウンセラーの延長線上の存在が必要である。

子どもの貧困には対策は最近増えつつあり、2013年には「子どもの貧困対策法」が制定された。しかし、食格差についての支援はまだ乏しいというのが現状である。

食格差の対策案としてはいくつかある。支援の対象として、家庭に対する対策や支援、子ども自身への対策や支援が必要である。そして両方に対して食事確保のための食物を提供すること、先に述べたように食生活の経験が少ないという食生活の貧困連鎖を断ち生活スキルを習得するための食育が必要である。それらの実施する対策として生活困窮層で特に成長に必要な食事量と質が十分ではない人々への対策「ハイリスク対策」とすべての層に働きかけることによりハイリスク層の改革も狙う「ポピュレーション対策」がある。

ハイリスク対策は生活困窮世帯等、必要な食物や栄養素が足りない人々に、食物支援、補助金支給をするもので短期的には必要な人に効率的に支援ができるため格差縮小につなげ

ることができる。フードバンクや子ども食堂がその例でもある。学校のある日は給食提供などがあるが、長期休みに入った場合、家庭はいつもより食費が多く必要となり家計を圧迫することになる。フードバンクでは生活困窮世帯に食物を支援して食物の欠食を防ぐことが出来る。子ども食堂の場合子どもの居場所としても機能が出来る上に、調理を手伝うことで欠食防止にもつながりかつ食育にもつながることができるのだ。

ポピュレーション対策は先に説明したとおり、全ての人に対策をすることで必要な食物や栄養素等の摂取量の高める対策であり、全体に恩恵があり、生活困窮世帯のみに特別な扱いをしなくてすむのだ。ここでの例としては学校給食が例としてあげられる。2章の最後にも述べたように学校給食は食格差縮小のため重要な対策である。給食を通して栄養バランスの良い食事を取ることができ、食の流通や食文化を学ぶことができる。また給食は自分たちで配食して、片付けもするという生活習慣を身につけさせることができる。そして友達と同じ食事を食べ、世帯格差などないコミュニケーションできる場でもある。なかなか自分の家庭で豊富な栄養を摂取することのできない生活困窮世帯では一般的な世帯に比べ、学校給食に依存している割合が高いことがデータで証明されているのだ。日本の学校給食は世界各国のメディアでも安価でおいしくて、バランスのとれた食事を提供できるので高く評価されている。その結果として日本はアメリカなどの肥満大国に比べて肥満率は低いのだ。そして学校給食が食格差縮小につながっている。低収入層の子どもの栄養摂取状況を中収入層と比較したものがある。学校給食のない日は、世帯収入が少ない生徒は中間層の児童に比べて摂取量が少ないためマイナスになっている。一方で給食のある日はゼロやそれに近い値であり、世帯収入による食物や栄養素の差が見られない。これは世界で初めて学校給食が食格差を縮小させることの示したグラフであり、結果として日本の学校給食は食格差縮小につなげることができる最良の対策なのだ。

またこのほかに経済的支援として、食物の価格（特に健康に必要な食物）を安価にすることである。健康に害があるたばこや砂糖の多い飲料や脂肪の多い食べ物の税金を上げる代わりに、健康のために必要な野菜・果実、卵、肉魚等の生鮮食品の消費税を安くすることで全ての人にアプローチすることができ、低所得世帯の食確保に繋がると考える。

今まで子どもの貧困対策や食格差の対策を述べてきたが、最後に「終わりに」でこれまでの対策には必ずデメリットがあり、課題があることを説明し、本稿の見解を述べていく。

終わりに 残された課題・本稿の見解

世帯収入の少ない世帯に対して補助金支給や食物支援をするハイリスク対策は低収入そのものは変わらないため根本的解決につながらず、その世帯に長期の支援をし続けることが必要で、持続性に問題がある。2章でも例を挙げたフードバンクもいつまでも支援し続けることができるならよいが食物にも限りがあり、収穫量によって支給出来る量も変わってくるので1つの団体だけで支給し続けることも困難であるので野菜はJAやお肉は大企業の力を借りて支援してもらうことが必要だと思う。そのためにはフードバンク関係者と会社やJA関係者がつなげることができるように、シンポジウムのようにその問題を知ってもらうための講演会などを開催するべきである。

子ども食堂の場合、一般家庭で子ども食堂を開催しているところも多くあり、ボランティアスタッフの人が多くいるが、子どもや家族連れが多く来てかつバイキング形式でもある

ため、多くの調理が必要になるのでボランティアスタッフが少なくと時間内に調理が終わらないことがあるという人員不足の問題も発生してくる。また食物はフードバンクなどから支給は受けているものの足りないものはスタッフたちで買っているという問題があった。また開催するにも施設の問題もあり、まだ解決すべき課題も残っている。子ども食堂の存在はまだ知らない人が多くいる。自分もこの学校に入ってから子ども食堂というものを知った。実際にボランティアに行き、多くの子どもたちや地域の人たちに交流することができ、子どもたちは「これ作って」「遊ば」などといってくれ、ボランティアスタッフの人も毎回自分を温かく迎えてくれる帰りにはその日作った食物をもらえる。そのご飯をその日夕飯にしている。また料理のやり方や社会性を学ぶことのできる場所で、通ううちにこの子ども食堂が自分の実家に居るような温かい居場所にいるような感じがした。そして実家にいる時のように栄養バランスのとれた食事を取ることができるので自分のような1人暮らしも大変助かっている。子ども食堂に来る子どもたちも友達を誘って来ていることが多いが物作りの時間などでは子どもたちは年齢差関係なく物の貸し借りや物作りの教え合いをしているので子ども食堂は地域コミュニティの場所でもあることを再認識することができた。

シンポジウムでも言っていたが居場所が生み出すものは社会や家族からの期待やまなざしから解放され、子どもの話をじっくり聞いてくれる他者の存在を居場所があることによって獲得することができるので、家や学校で孤独な子どもをその現状を知っている人や立場のある人が機能しなければ子どもの貧困は解消されない。地道にその子と顔を見せて接し、信頼関係を築いていき、その子の居場所を共に見つけていくことが大切である。

全体に恩恵があり、生活困窮層のみを特別扱いしなくてもよいポピュレーション対策では、全世帯でその恩恵を対象にすることでこれまで多く栄養素等を摂取していた良好群がさらによくなり、生活困窮層は変わらないため、格差がさらに拡大する恐れがあるのだ。またその対策案で学校給食が重要になると説明したが、実際学校給食は全国完全実施しておらず、小学校は0.4%、中学校では20%の中学校が給食をしていないのが現状である。またこの学校給食実施の全国的なデータ収集と公開がされていないので、各家庭にも学校給食の実施状況を知ってもらうべきである。なぜ一部の地域は実施していないのかという給食費未納問題があるからである。中学校に入ることで学校関係の支出が多くなり、給食費を払えない家庭が出てくるのだ。

私が通っていた中学校はデリバリー方式を取り入れており、自分の学校に給食センターがなく民間事業者の施設で調理された給食が配送されてきた。その給食費は事前に券売機で買わなければ食べることが出来ない所以給食費の未納という問題は解消される。券売機で買っていない人は家から弁当を持ってきて食べていた。デリバリー方式の欠点としては払えなかった人たちである。家からの弁当がある人はそれを食べれば良いが弁当が作ることが出来ない家庭はその日は昼食がないということになる。このことはまだ課題が残っているので解決策が必要である。このことで迷惑するのはその家庭の子どもであり、栄養が十分に摂取出来ないことで食格差が広がってしまう。

埼玉県滑川市は給食費完全無償化を行なっている。注2しかし、全ての市町村が給食費完全無償化は難しい。全国の給食費完全無償化の費用は4460億円と試算されており、多くの財源が使われる。国は生活保護や就学援助金で中学校の給食費や学用品代を支給している

がそれらは市町村に全て一任しており、支給対象基準、支援内容に関する自治体格差は大きい。市町村にも経済力があるところとないところはあると思うので、経済力はあるところは多くの金額を援助することができるが、経済力がないところは財源に限りがあると思うので支給基準も高くなり、支給額も少なくなると思う。そういう問題が起こるのならば、国が支給対象基準や支給額を決め、援助金が足りない場合は国がその市町村に追加で援助金を与えれば自治体格差はなくなる。この問題が解決すれば学校のある日の子どもの食格差は縮小する。しかし学校のない日のご飯や朝ご飯を抜く問題はまだ残っている。東京都足立区の小学校では「学校で朝ご飯」というプログラムがある。(注3)地元のボランティアの人が朝に集まり、希望すれば誰でも食べられるというシステムになっている。このプログラムを通して、健康的な朝ご飯を食べられるうえ、学校の子どもたち、教員、地域の方々の交流の場(居場所)にもなっているのだ。埼玉県越谷市では夏休みの学童保育への給食提供を行なっている。家から持参した弁当の食中毒の予防や家庭の弁当以外に菓子パンやインスタント麺を食べている子どもも少なからずいるということで実施された。これは子どもの保護者から高い評価を得ている。近年この活動が全国に広がってきている。

その他に土日に子ども食堂が行なわれているが、施設の問題や人手不足などがあり、月に1.2度行なうのが限界である。学校のない日に子どもたちに定期的にバランスの良い食事を与えるのがこれからの課題である。この食格差改善が子どもの貧困改善へと繋がっていくのである。

参考文献

- ・子どもの貧困～解決策を考える 岩波新書 阿部彩
- ・子どもの貧困と食格差～お腹いっぱい食べたい～ 大月書店 阿部彩・村山伸子・知悠子・鷹咲子
- ・子どもが輝く未来に向けたシンポジウム～「子どもの貧困」について何ができるか、一緒に考えてみませんか～

注1 「子どもの貧困」 金銭的経路 p41～43 家庭環境を介した経路 p44～52 遺伝子を介した経路 p52～54 職業を介した経路 p55～56 健康を介した経路 p56～59 意識を介した経路 p59～64


注2 「子どもの貧困と食格差」 埼玉県掛川市の給食費無償化 p127～131

注3 「子どもの貧困と食格差」 東京都足立区学校で朝ごはん p23～26

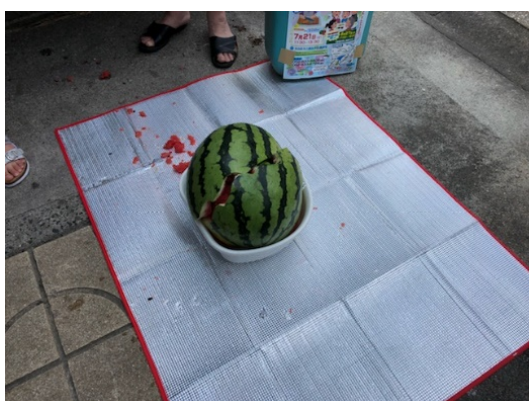
にっこにこ子ども食堂

<p>1.子ども食堂紹介</p> <p>場所：黒田宅（名古屋市天白区元八事 5-43）</p> <p>代表：黒田さん</p> <p>実施日：毎月第3土曜日</p> <p>参加日時：2018年6月16日(土)11:30～13:30(ボランティアは9:30～15:00)</p> <p>参加費：子ども無料（大学生まで）大人300円</p> <p>参加人数：大人23人 子ども9人</p> <p>献立：おにぎらず（そぼろ、ハムチーズ、おかか）・味噌汁（ジャガイモ、大根、わかめ）・シューマイ・いり豆腐・きゅうりのぬか漬け・スナックきゅうり・デザート（アイスクリーム、さくらんぼ、ゴーフル）</p> <p>参加・記録者：平本駿介(中京大学成ゼミ2年)</p>	 
<p>2.当日の流れ</p>	
<p>9:30～ 11:30 料理作り（ジャガイモを切る、おにぎらず製作）</p> <p>11:30～ ご飯をみんなで食べる</p> <p>13:00～ 童話や童歌</p>	
<p>3.食材、献立</p>	
<p>食材：カンパ（あま市杉藤様）・タマネギ、じゃがいも（豊川の東岡様）・タマネギ、大根（元八事の川上様）・きゅうり、なす（植田一本松の浅井様）・手作りパン（小塚様）・わかめ（永坂様）・のり（藤阪様）・大豆ミート、ゴーフル（セカンドハーベスト春日井様）</p> <p>献立：事前に黒田さんたちボランティアの人たちが決める</p>	
<p>4.課題・思い</p>	
<p>ボランティアの数が少ないため仕事が多い。</p>	
<p>5.感想</p>	
<p>食堂は住宅街の中にあり、住民の人が集まりやすい場所だった。子ども連れも家族が多く、机も長机だったのでみんなで話しながら食べることができる雰囲気だった。また今回は食後、童話と童歌をみんなで聞くことだった。みんなで参加しやすいものも多く子どもたちも楽しそうだった。子どもたちは年齢的には3歳あたりの子どもが多く元気がすごくよかったのでご飯を食べた後はお絵かきなどをして遊んだ。近くに住んでいてスーパーの紙を見て参加してきた名城大学の4年生もいた。</p>	



にっこにこ子ども食堂

<p>1.子ども食堂紹介</p> <p>場所：黒田宅（名古屋市天白区元八事 5-43） 代表：黒田さん 実施日：毎月第3土曜日 参加日時：2018年7月21日(土)11：30～13：30(ボランティアは9：30～15：00) 参加費：子ども無料（大学生まで） 大人 300円 参加人数：大人 16人 子ども 9人 献立：そうめん・いなり寿司・サンマのパン粉焼き（カレー味、チーズ味）・野菜サラダ・フライドポテト・ソーセージ炒め・十六ささげとアグロ味付け缶の煮付け・デザート（スイカ、お菓子詰め合わせ） 参加・記録者：平本駿介(中京大学成ゼミ 2年)</p>	
<p>2.当日の流れ</p> <p>9：30～ 11：30 料理作り（ジャガイモを切る、キュウリの皮をむく、いなり寿司製作、サンマをパン粉につける） 11：30～ ご飯をみんなで食べる 13：00～ スイカ割り</p>	
<p>3.食材、献立</p> <p>食材：カンパ（あま市杉藤様）・十六ささげ（豊川の東岡様）・青じそ、みょうが（元八事のリオ様）・カボチャ、スイカ、枝豆（植田一本松の浅井様）・お菓子（地域の匿名の方）・きゅうり、トマト、うり（見晴台学園大学の平子様）・サンマ（セカンドハーベスト名古屋様） 献立：事前に黒田さんたちボランティアの人たちが決める</p>	
<p>4.課題・思い</p> <p>ボランティアの数が少ないため仕事が多い。</p>	
<p>5.感想</p> <p>今回は二度目の子ども食堂だった。今回はとても暑かったのもあり、子どもたちが来るのが遅かった。学生ボランティアは名城大学の4年生、3年生の生田さんと3人で行った。子どもたちは先月と同じような子どもたちが多かった。また今回はそうめんだったのもあり、すぐに売り切れた。食後の活動のスイカ割りでは子どもたちから先に始め、少しずつヒビを入れていき、最終的に学生が割った。外で行ったためとても暑かったが大いに盛り上がった。来月は花火なので夕方から行うそうだ。</p>	

その他の写真 (スイカ割り)



にっこにこ子ども食堂

<p>1.子ども食堂紹介</p> <p>場所：黒田宅（名古屋市天白区元八事 5-43） 代表：黒田さん 実施日：毎月第3土曜日 参加日時：2018年11月17日(土)11：30～ 13：30(ボランティアは9：30～15：00) 参加費：子ども無料（大学生まで） 大人 300 円 参加人数：大人 20人 子ども 13人 献立：栗ご飯、とんかつ、とうがん煮（大 根・枝豆・紅葉型に切り抜いたにんじん・肉 そぼろ）、手作りパン、大学いも、みかん、 柿、ぶどう、ドーナツ 参加・記録者：平本駿介(中京大学成ゼミ 2 年)</p>	 
<p>2.当日の流れ</p>	
<p>9：30～ 11：30 料理作り（料理の手伝い（大学いも製作など）、洗い物、） 11：30～ ご飯をみんなで食べる 13：00～ マジック鑑賞</p>	
<p>3.食材、献立</p>	
<p>食材：カンパ（あま市杉藤様）・お米、ジュース（中村区のニコニコこどもクリニック 様）・さつまいも（豊川の東岡様）・お米、柿、みかん（一本松の浅井様）・手作りパン （小塚様）・ぶどう（元八事のリオ様）・ドーナツ（地域の人から）・豚肉（(株) クレスト 様） 献立：事前に黒田さんたちボランティアの人たちが決める</p>	
<p>4.課題・思い</p>	
<p>多くの食材の寄付はもらっているが黒田さんたちボランティアスタッフが食材を実費で 買っているところもある。</p>	
<p>5.感想</p>	
<p>今回はメインがとんかつでその後の活動がマジックということで多くの子どもたちが集 まり大盛況であった。作ったとんかつと栗ご飯がすべてなくなり、子どもたちもおおい そうに食べていた。マジックも地域のおじさんが前から練習していたらしく大人たちも 驚くマジックも多々あった。黒田さんが家にあるピアノでマジックのBGMを弾いてく れたのでよりマジックショーの雰囲気を味わえた。今回は名城大の学生に加え、東海学 園大学の二年生、名古屋学院大学の四年生もボランティアスタッフとして来ていた。</p>	

にっこにこ子ども食堂

<p>1.子ども食堂紹介</p> <p>場所：黒田宅（名古屋市天白区元八事5-43）</p> <p>代表：黒田さん</p> <p>実施日：毎月第3土曜日</p> <p>参加日時：2018年12月15日(土)11：30～13：30(ボランティアは9：30～15：00)</p> <p>参加費：子ども無料（大学生まで） 大人300円</p> <p>参加人数：大人23人 子ども9人</p> <p>献立：ケチャップライス・鶏の唐揚げ・ジャーマンポテト・コーンスープ・サラダ・手作りパン・みかんジャム・昆布豆・ケーキ・お菓子</p> <p>参加・記録者：平本駿介(中京大学成ゼミ2年)</p>	 
<p>2.当日の流れ</p>	
<p>9：30～ 11：30 料理作り（唐揚げをあげる、カボチャを切る、パセリのみじん切り）</p> <p>11：30～ ご飯をみんなで食べる</p> <p>13：00～ クリスマスリース作り</p>	
<p>3.食材、献立</p>	
<p>食材：カンパ（あま市杉藤様）・じゃがいも（豊川の東岡様）・柿、みかん、にんじん、大根（一本松の浅井様）・手作りパン（小塚様）・にんじん、リース（元八事のリオ様）・お菓子（地域の方から）・鶏肉（味仙様）・じゃがいも、お菓子（見晴台学園）・パン、みかんジャム（池見の鈴木様）・とうがん、さつまいも（元八事の近藤様）</p> <p>献立：事前に黒田さんたちボランティアの人たちが決める</p>	
<p>4.課題・思い</p>	
<p>物作りを通して子どもたちが年齢問わずもっと交流してほしい。</p>	
<p>5.感想</p>	
<p>今回は季節がクリスマスということもあり、唐揚げに加えデザートにはケーキだったため先月より多くの子どもたちが子ども食堂に来てくれた。ケーキもケーキ屋さんの本格的なケーキであり、何種類もあった。子どもたちはご飯を食べたらケーキのあるテーブルに一目散に向かいケーキを選んで食べていた。その後はクリスマスリース作りをした。いろいろな年代の子どもたちが集まりリース作りをした。お互いにももの貸し借りを口で頼んだり頼まれたりでけんかもなくリース作りができた。</p>	